

最近の IT 用語

大西静麿（2020 年 3 月 16 日）

◆フィンテックとは

金融（ファイナンス）と情報技術（IT）を合わせた言葉。

AI などのコンピューターやビッグデータなどの新しい技術を活用して、金融の融資、決済、送金、資産管理、投資など金融全般のサービスを行う。フィンテックの発達でスマートフォンやタブレットを活用して、お金全般に関するサービスを手軽に、簡単に利用できるようになった。

◆普及の中心がアフリカへ

大手会計事務所アーンスト・アンド・ヤングが昨年まとめた報告書によると、フィンテックの導入率は中国とインドが同率の 87% で首位だ。トップ 10 は 9 位の英国（71%）を除くとアフリカや南米の新興国の躍進が目立つ。日本は調査対象の再開（34%）だった。IT を使いこなす能力は世代ごとに差があり、若者の方が抵抗感なく受け入れやすい。2030 年ごろには平均年齢が若いアフリカがフィンテック普及の中心になり、世界経済を牽引するとの予測もある。先進国と新興国の関係まで変える可能性があり、日本も対応が必要である。

フィンテック対応に力を入れる英国は先進 7 か国（G7）で最も高い導入率を維持する。英政府の報告によると、今後 10 年以内にフィンテック企業は約 3000 社に倍増し、雇用創出でフィンテックに従事する労働人口は 3 7 % 増える見通しだ。

◆世界のフィンテック投資額

コンサル大手のアクセンチュアによると、2018 年の世界のフィンテック事業への投資額は 553 億ドル（約 6 兆 1000 億円）で 17 年の 2743 件から約 2 割増えた。世界全体の投資額の 4 6 %（255 億ドル）を中国が占める。中国の投資額は 17 年から約 9 倍に急増した。

スマートフォン決済サービス「アリペイ」を展開するアリババグループのアント・フィナンシャルなどが積極的な投資を行っている。米国が 31%、英国が 7% で続く。日本の投資額は 1 %（約 5 億 4200 万ドル）にとどまっている。

◆デジタル通貨とは 「中央銀行発行デジタル通貨（CBDC : Central Bank Digital Currency）」とは、次の 3 つを満たすものであると言われています。（1）デジタル化されていること、（2）円などの法定通貨建てであること、（3）中央銀行の債務として発行されること。

<機械学習とは>

過去に人間が運用した膨大なデータから役に立つ法則性や判断基準を AI のような「機械」が学習して、未知の状況を予測する技術。

その発展形となるのが、深層学習（ディープラーニング）で、人間の脳神経をまねたコンピューターが自ら何を基準に判断するかも決めて、人間の指示を待たずに独自に学習発展させることができる。

<ブロックチェーンとは>

複数のコンピューターで取引データを共有し、分散管理する仕組みで分散台帳とも呼ばれる。

暗号資産の基礎技術としても知られる。

一定の時間に行われた取引データの塊（ブロック）を鎖（チェーン）のようにつないで記録することから、この名がある。分散型システムのため、障害に強く、データの改ざんが難しいなどの利点がある。

<量子コンピューターとは>

「量子」は光の電子などミクロの量子のことで、その極微の現象を利用して計算する。

大量の情報を一度に扱う高速計算ができ、新薬や暗号の開発などの応用が期待されている。

昨年 10 月には米国のグーグル社が「スパコンで 1 万年かかると言われる特殊な計算を、量子コンピューターで 3 分 20 秒で解いた」と発表し、話題を集めた。

現在のコンピュータでは 1 ビットでは 0 か 1 のどちらか 1 つしか表す事が出来ません。

量子コンピュータの 1 ビットは「0 か 1 のどちらか 1 つ」ではなく、例えば「0 の可能性が 30% で 1 の可能性が 70%」という具合に表現できるのです。